

文献案内

菅原正子「將軍足利家の肖像画にみえる服飾―桐紋と金襴―」(『国史学』

二二七号、国史学会、二〇一九年二月)

神護寺三像の再検討から足利歴代將軍の肖像画・彫刻の見直しが進むが、顔貌表現の類似性に集中しがちで、議論が十分でない服飾を正面から扱う。

はじめに、自明とされがちな足利家の家紋として桐紋の性格を文献史料から検討する。尊氏が後醍醐天皇より賜ったとの伝承もあるが、足利家では二両引が主要で正式な家紋として用いられ、桐紋は副次的であった。明らかに家紋として用いた早い例は、応永二十八年(一四二二)元日の義量の直垂となる。足利家以外で桐紋を用いる事例からは、清和源氏の家の紋であったのが、將軍家への憚りが生じ、將軍の許可によるものとなったと推測される。

ついで、義満の複数の法体肖像画を観察し、桐竹文ないし桐文の赤色の袍裳に金襴(牡丹唐草文)の袷袢・横被と確認し、上皇・皇族と同格かつ高級舶来品で、義満の政治力・経済力を誇示するものと把握する。『法体装束抄』などの記述と対応させ、義満太政大臣拝賀(応永二年)に桐竹文の袍、義持(元服・任太政大臣(応永元年))に桐唐草文の直衣を初見例とし、竹とセツトでない単独の桐文を考案したのは義満で、これを家紋化の時期と捉える。

さらに応永十五年の義満葬儀で龕・天蓋に用いられた桐紋金襴に注目し、桐でも中国と日本とでは種類が異なり、織物としての金襴で桐紋はありえず、印金(箔・泥)によるものと推測する。以降、浮織綾などの桐唐草文の装束は將軍權威を示すものとなり、満詮・義教の肖像画に確認できる桐唐草文の袷袢は、義満からの伝領や意志の継承とみなされる。足利義尚の騎乗出陣影は、金襴の桐唐草文(印金か)の鎧直垂で、將軍家の最後の光芒となった。

室町殿権力や東アジア交流の研究隆盛を背景とするが、とくに京都国立博物館の二〇一〇年の特別展「高僧と袷袢」では、頂相に描かれた服飾と遺品の染織類が踏み込んで比較され、肖像画の見方を二段階深める機会となり、本論文のような視角が準備されたことに触れておきたい。(藤原重雄)

的場匠平「月輪陵域内所在陵墓石塔に見る近世天皇・皇族の墓制」

(『書陵部紀要』第六九号、平成三〇年三月)

的場匠平「陵墓石塔実測図目録」(『書陵部紀要』第七〇号、平成三一年三月)

陵墓というと、円墳や前方後円墳などの高塚式のイメージが強い。しかし、墳塋主体に層塔や五輪塔、宝篋印塔などの石塔を宮建するケースも多く、その所在や石塔の形状については一九九九年に出版された『陵墓地形図集成』(二〇一四年に同書縮小版も刊行)の「歴代順陵墓等一覧」に記載され、個々の詳細を知ることができる。また、宮内庁書陵部には昭和十三年から十七年頃にかけて当時の宮内省諸陵寮が調製した陵墓石塔実測図(以下石塔図)が現存する。この石塔図には京都市内に所在する陵墓石塔二七九基の正面・平面図および種子や補足的な図などが記載され、現在も書陵部陵墓課の業務で活用されているという。ここで紹介する二本は、この石塔図にもとづく論考と、石塔図の概要および目録である。

前者では、月輪陵(京都市泉涌寺内に所在)の近世天皇塔と皇族塔(女院塔・親王塔)について、石塔図とともに関連する文献史料や管理写真を用い、各石塔の形態がどのような経緯で決定したのか、營建方針の推移・変遷を追う。そして石塔本体だけでなく、各墓域を構成する敷石や石柵・石門なども分析することで、身位や出自が石塔の大きさや格式、墓域の面積に反映されていることを明らかにしている。さらに、一八世紀後葉に陵墓石塔の規模が拡大する背景に、同時期の山陵造営機運の高まりをみる。

後者では石塔図および石塔図調製事業の概要を紹介し、石塔図の抱える問題点や、その使用に際して留意すべき点などに触れた上で石塔図の総目録を載せる。巻頭に掲載する実際の石塔図カラー図版も必見である。

石塔図については筆者が述べるように、「考古・建築・美術史的に研究するうえで基礎的史料となりうるもの」であり、近世のみならず、中世の石塔研究にとっても重要な資料といえる。

現在、史料編纂所に拠点を置く基盤研究(S)一七H〇六一一七(研究代表者田島公)によって、石塔図五二八枚のデジタルデータ化が完成しており、公開に向けての準備が進められている。(太田まり子)